

顧みれば「化石」第100号

高柳洋吉

〒980-0011 仙台市青葉区上杉3-9-16

Japanese Bulletin “Fossils” in my recollection

Yokichi Takayanagi

はじめに

1960年に産声をあげた日本古生物学会の邦文機関誌「化石」はこの2016年でもってついに第100号の誕生を迎えることになった。創刊以来半世紀以上にまたがる歴史を積み重ねてきた本誌の、前半期には直接編集に携わり、交代した後もまた発展経過を見守り続けることができた者の一人として、今ここにささやかながら思いをつくまを記す。

「化石」の歴史的機能

本誌誕生に至る事情ならびに創刊以来第50号発行に至るまでの道程については、すでに“「化石」第50号までの道”（高柳, 1991）として記してあるので、詳細はそちらに譲りたい。今更言うようだが、近縁の諸学会の状況を見渡してみても、会の機関誌として、欧文誌と邦文誌を並行して発行し続けている学会は見あたらない。その意でも、日本古生物学会における「化石」の歴史的な位置付けというべきか、当時までに演じてきた役割を明らかにした、小林貞一名誉会長の歴史的証言：“邦文会誌「化石」と共に歩む30年, 1960–1990”（小林, 1990）は貴重である。

学会の発展的活動につれて、その機関誌の役割も多様化しつつ現在のよう「化石」に到達したのだが、ここでそのあらましに少し触れておこう。

1935年 日本古生物学会がInternational Palaeontological Union (IPU) に対応する組織として、日本地質学会の部会の形で創立され、以来その活動成果は地質学雑誌に「日本古生物学会報告」として掲載されることになった。

1951年 日本古生物学会の現在の機関誌Paleontological Research (1997～)の前身である、「日本古生物学会報告・紀事, 新篇 (Transactions and Proceedings of the Palaeontological Society of Japan, New Series)」の発行となる。

1958年 古生物学会が日本地質学会より独立。

1960年～1981年 邦文機関誌「化石」が創刊され、第1～30号発行 (A5判時代)。

1982年～2002年 「化石」第31～71号発行 (B5判時代)。
2002年～2016年現在 「化石」第72～100号発行 (A4判時代)。

言ってみれば、ほぼ20年ごとに大判化を繰り返しつつ第3期に至り、読者の好奇心をそそる華やかな表紙デザインの採用、カラー口絵の取り入れ、そしてそれにふさわしい用紙の向上などを成し遂げて今日に至った。このような邦文機関誌としての体裁はもちろん、その内容もまた時代の要請に応じて変化し、歴代の編集委員会の苦勞によって機能もまた多様化してきたのである。

学会誌としては、根幹となる諸論説・成果報告などの発表の場としてはもとより、連絡・情報伝達などの機能を果たすことが不可欠であるが、現在のよう情報テクノロジー (IT) 社会の急速な進歩と展開のなかで、当面する問題についてはいささか考えざるを得ない。

近年の「化石」誌の内容を振り返ってみると、おおむね論説、解説、化石友の会コーナー、書評、国際学会集報告、追悼記事、学会運営関係記事などで構成されている。しかし、正直な話、インターネットによって刻々学会活動情報が個々の会員に伝達され、またその意見が集約されている今日、これまでのような内容と体裁の機関誌がいつまで続けられるのだろうか？

折しも2016年3月23日付けの新聞各紙は、「デジタル教科書導入へ」と伝えた。文部科学省の有識者審議会が紙の教科書とデジタル版の併用を認めて、将来的には紙とデジタル版のいずれか一方を使う選択制も検討するという報告書案を提示したとあった。その詳細はいまだ不明とはいえ、紙の文化に浸りきっていた者には衝撃的に響いた。これら有識者の思案が学術雑誌のうえにまで及んだのかどうかは不明だが、「化石」においてもデジタル版化できる部分と紙媒体として存続させるべき部分との仕分けがいずれ必要になるかもしれない。

昔話になってしまうが、終戦後まだ数年しか経過していなかった時期に筆者は大学に入学した。当時の地質古生物学の教室で身の周りで使われた道具というと、欧文タイプライターと計算尺とごく少数の計算機 (手回しのハンドルつき) のみ。野外調査となると、ハンマー、クリノメーターを手し、首にループを下げて、地下足袋はいて、ゲートル巻いて……。カメラまで手にできたのは

ごく少数派だった。このような“風俗”は明治中期以来ほとんど変化していなかったのではなかろうか。

大学を卒業した1950年前後の時代を思い出してみると、当時はまだ海外との学術交流・情報交換も限られていたが、仲間たちは皆研究意欲に燃えていた。一例を挙げれば、新しい研究手法として古生物学に生物統計学が積極的に導入され始めたのもこの時代であった。しかし、総じて物資も資金も不足で、学会誌の印刷・発行も満足にできない劣悪な状況下であり、研究者たちは限られた成果発表の場を、また必要な情報を求めて苦労していたのである。

以来長らく時が経過し、筆者は現役時代の中後期に至って走査型電子顕微鏡を、また晩期にはようやくパソコンをはじめ大型電子計算機まで頼りにできる研究態勢に接したのだった。このような世代には、今世紀におけるITの急速な発展によって、これからどこに行き着くのやら見当つけかねることが多い。

少し視野を広げて、「化石」誌と同様に、変貌しつつある邦文の地球科学領域の学協会誌や連絡誌あるいはまた広報誌などに目をやると、現在それぞれが独自の編集方針を模索しつつ、発行に苦心している様子が見えてくる。

では、「化石」に対して今後どうすることが期待されるのだろうか？ 情報の種類や性質はIT全般の進行に合わせて当然変化してゆくのであろうが、思い付きのごく一端を挙げてみる。

現在余震の続く「熊本地震」を案じつつ暮らしているが、過去にいくたびか大地震を体験した身には、気がかりな事が多々ある。中でも、古生物学の研究にとって基本的資料である標本類、特に模式標本類の保全が案じられる。国内各地に数多く分散している保管施設・設備は大型地震に遭遇しても無事なのだろうか？ 実を言えば、かつて東北の一角で揺れ動く研究室にいて、標本類を収めた筆筒から飛び出す引出を必死になって抑えていた経験の持ち主としては、被災地の大学や博物館など研究機関の状況が気になって仕方がない。この種の所在情報などは、会員の協力により調査を進め、そして集約した結果を「化石」に速報してみてもどうだろうか。将来とも発生する同様の問題について意見を交換し、方策を講ずるための場ともなるであろう。

さらに先走るが、やがて迎える学会創立100周年記念事業の一環として、「化石」の総目録の整備などが必要となり、会員の活動領域や足跡を総括的に回顧するためにも、分類群・地域・著者別などの項目索引や、年表編纂に工夫すべきではないだろうか。これには科学史家たちの活動が期待される。

昔を偲び、翻っては近未来を少々案じて、やたらと気になることのみを記した。

近未来の問題——結びに代えて

2016年の春になって、とりわけ人工知能（AI）についてひと騒ぎが起こった。産経紙上で論説委員の長辻象平氏が、その日曜随筆のなかで「AIが囲碁専門棋士を破った」というニュースに関連して興味深い見解を発表していた。その取っ付きの見出しに「30年後、人類は自滅へ」と振っている、この論議の結論のあらましを記せば、宇宙へいずれは進出してゆく地球生命が活動を持続し、存在できるのはAI搭載のロボットしかあるまい。その時点で人類は衰退しているかもしれないが、これも新環境への適応という面では「進化の一形態」であると記されていた。ちなみにその題目を紹介すれば、「ホモ・AIエンシスの胎動」である。

それより日をおかずに行なわれた文芸春秋誌では、佐藤健太郎氏の随筆で「アルファ碁」の出現に対する同氏の「原初的恐怖」感が告白されている。さらに松尾豊氏は「人工知能が社会を大変革する日」を予測して論じた。「アルファ碁」（人工知能囲碁ソフト）が開発され、現在世界のトップクラスの棋士と対戦して、4勝1敗で勝ち越した。松尾氏によれば、そこで用いられた技術が「ディープラーニング（深層学習）」という新技術である。その詳しい解説のなかで「特異量」（singularity）の抽出のような画像認識の精度向上、それに続く人工知能の発達、自動翻訳のような多岐にわたる分野での自動化などが論じられている。そしてその結びに近づいて、長辻氏が抱いたような危惧感と同様に、かつてS.W. Hawking教授が「人工知能の開発が人類の終焉を意味するかもしれない」と案じていた問題に触れている。しかし同氏は「ディープラーニング」がもたらすのは機械性能の向上であって、ニーズの変化ではないと述べて、いささか読者を安堵させているところがミソかもしれない。振り返ってみて、生物進化を追究する者としては、今後の化石研究面でのこのディープラーニング技術の活用を考えずにはいられない。

しかし、もはや筆者の想像力の到底及ばないような近未来の問題はさておき、ここで思い出すのは、かつて松本達郎名誉会長が本誌に発表された特別寄稿「わが託する夢（ヒト種の長命を願って）」（松本、2002）である。何しろ2009年に95歳で永眠されるまで研究に励まれた松本先生の事であるから、まだ米寿の頃に物されたこの論考をもって遺言扱いはできないだろう。とはいえ、今読み返してみても後進にとって耳に痛いことも指摘されている。先生の論旨は、前述したような人類の将来に対する最新の悲観論とは違って、あくまでも *Homo sapiens* の長命と進歩への期待にあふれているので、未見の方には一読を是非お勧めしたい。そして、本文中で先生が「化石」誌に対して、「邦文誌の充実是国内における知識の普及、研究課題への取り組みの多様化・組織化・発展に大

きな役割を持つに相違なく」,「さらに国内で課題を中心に関係者同士が切磋琢磨した結果が…国際的進展の基盤としても役立つように…」と切望されていることを強調しておく。

文献

- 小林貞一, 1990. 邦文会誌「化石」と共に歩む30年, 1990-1990. 化石, (49), 44-46.
松尾 豊, 2016. 人工知能が社会を大変革する日. 文芸春秋, 2016

(5), 206-213.
39-42.

松本達郎, 2002. わが託する夢 (ヒト種の長命を願って) (名誉会長特別寄稿). 化石, (72), 39-42.

長辻象平, 2016. ホモ・AIエンシスの胎動. 産経新聞, 4月3日, 14版, 7.

佐藤健太郎, 2016. 「アルファ碁」との遭遇. 文芸春秋, 2016 (5), 83-84.

高柳洋吉, 1991. 「化石」第50号までの道. 化石, (50), 57-61.

(2016年6月6日受付, 2016年6月29日受理)

